



石川 洵氏を偲ぶ

3D フォーラム
桑山 哲郎
KUWAYAMA, Tetsuro

石川 洵氏が急逝されたというお報せを受け、とても信じられませんでした。4月28日、満77歳で急逝されたとのことでした。石川さん（以下、こう書かせていただきます）とはこの2023年の夏に向け、日本カメラ博物館で子供向けのホログラフィ講座を計画していました。石川さんが寄贈されたホログラフィカメラを使って、受講者にホログラムを撮影してもらうことを予定していました。初めてお会いしてから40年、度々一緒に活動してきたのが、もう終わりということは信じたくありません。

石川さんとの長年の交流を思い出すと、あまりにも良い思い出が多くて、何を取りあげるか迷ってしまいます。まず、石川さんのお人柄について書かなければなりません。石川さんに接した方は皆、その温かい人柄と優しい語り口に魅了されたと思います。お願いされるときにも丁寧でしかもはっきりした説明から始まります。そして一緒に作業、活動では大変気持ち良く進行し、終わった後に残る印象がまた良くて、ぜひ次の依頼にもお応えしたいと思いました。

石川さんは有限会社石川光学造形研究所の代表取締役で、多摩美術大学の非常勤講師も担当したことがあります。また大学の先生方との共同研究の研究論文も発表されています。石川さんがホログラフィと取り組むようになった経緯は、2通のインタビュー記事^{1,2)}から知ることができます。日本オプトメカトロニクス協会では、2019年10月に開催したセミナー「空中ディスプレイ～高解像力・高機能化～」で、「空中ディスプレイの展示用商品例」の講演と機器のデモをおこなっていただきました。

私が石川さんと最初にお会いしたのは、石川光学造形研究所を名乗り始めた1982年頃だったと思われまふ。勝間ひでとし先生（多摩美術大学）の引き合わせによるものでした。そのとき、大企業勤めをやめ、自宅の敷地内でホログラフィ機器の開発とホログラム作りを行っているとお聞きしましたが、その後の大活躍は全く想像もできずにお付き合いが始まりました。現在でも（有）石川光学造形研究所のホームページ³⁾には立派な業績が掲示されています。勢揃いしている製品の姿を見ると、とても一人だけで行った仕事とは信じられないレベルです。石川さんとの一緒に行った作業は、1989年からの船橋コミュニティ・カレッジでのホログラフィ・アート講座、横浜こども科学館（現；はまぎんこども宇宙科学館）と3Dフォーラムの協力で開催した、数回を超える展示会とワークショップなど数々で、楽しい体験でした。3Dフォーラム（三次元映像のフォーラム）の設立準備会議でも、団体の名称や活動内容について着実な発言をされ、以後団体の活動を支え続けていただきました。

思い起こすと、十分にお礼を申し上げることができていないことが数々であることに気付きました。なかでも、ぜひ書き留めておきたいことがあります。2003年1月に、私は神戸芸術工科大学の社会人博士課程で、論文審査に向けての発表会を予定していました。石川さんが国内で唯一製造していた、マルチプレックスホログラムは論文の内容の重要な要素で、発表会で実物に代え動画を見せたいと考えました。石川さんにお問い合わせするとすぐ、VHSのビデオテープが届きました。応援に感謝し、動画は論文発表会で使うことができました。このときのお礼など、一言で簡単に済ましてしまったことを後悔しています。

空中に浮かぶ画像を巡っては、石川さんにしか相談できないことがあり、大変心強かったことも報告させていただきます。私の研究発表の中で、実物そっくりと感じられる3Dの映像表示を論じる部分があります。レーザーを用いて撮影したホログラムでは、ホログラムが作り出す3D映像は上下左右前後の寸法が元の物体と同じで、実物がその場に置かれているように見えます。一方テーマパークでは、こんなしかけを行っています。登場人物が3D映像として登場するのですが、その人物の寸法

が等身大で最初から最後まで変わりません。人物が目の前に立っているときも、はるか遠方に行っても身長は一定です。10年を超えて来場者を集めているアトラクションは、この原則に従っています。このポイントは、まるで言明することが業界で禁止されている様に報告で見つけることがありません。この発表をすると、関係者から「ネタバレで営業妨害である」という非難を受けるのではないかと、相談しました。石川さんは「全く問題ありません。これを理解している人は多いし、また理解できない人に対しては何も影響がありません。」とのことでした。私はこれで安心し、発表を行うことができました。

石川さんは、仕事が終わった後の処置も立派でした。1991年 NTT、多摩美術大学とのチームで、ホログラフィ映画再生装置“ホログラフィ動画評価実験装置(1号機)再生装置”が完成しました。研究としては、次々と改良機が試作されたのですが、この1号機は大切に保存されていました。2010年代の後半に石川さんから、この装置を東京工業大学博物館に寄贈し動作する状態で展示してもらおうようになったという報告を受け、手順に立ち会いました。この再生装置は2023年5月現在、完全に動作します。石川さんはホログラフィと同様機械設計についても独学で、取引相手からの要望を受けて必要な事柄を勉強、こなしてきたということですがその勉強能力の高さ、結果を実現する見事さは素晴らしいものです。石川さんの仕事の見事さをお伝えできると思い、動画を作成しました⁴⁾。

石川さんが作製された光学機器の多くは、カメラ博物館に寄贈されたホログラフィカメラをはじめ、動作可能な状態と思います。志半ばで逝かれてしまった石川さんの想いを受け継ぎ、今後に伝えられればと思います。石川さんを偲ぶ追悼文として始めましたが、書き留めたい事柄があまりに多く、ごく一部の報告となってしまいました。

石川さんの業績を伝えていくことが、後に残された私たちの責務と思います。ご冥福をお祈りいたします。

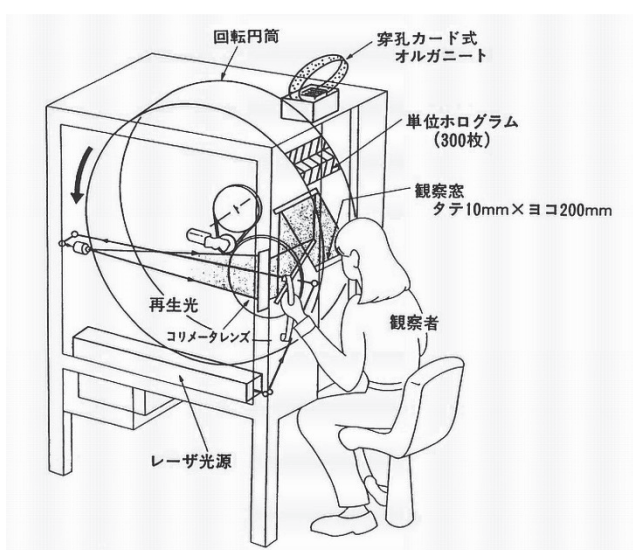


図 ホログラフィ映画再生装置1号機

参考資料

- 1) インタビュー記事：私の発言「ホログラフィは私にとって学校のようなものです」、O plus E, 2005年5月号, アドコム・メディア (2005)
下記の web サイトからも読むことができます。
<https://www.adcom-media.co.jp/remark/2023/05/08/107802/>
- 2) 三田村峻右氏によるインタビュー：日本のホログラフィの歴史編集委員会編、「日本のホログラフィの発展—究極の立体像を目指して—」, アドコム・メディア (2005)
- 3) (有) 石川光学造形研究所ホームページ
<http://www.holoart.co.jp/>
- 4) YouTube 動画“ホログラフィ映画“少年のORGEL I” 石川洵 様への追悼”【桑山作成】
<https://youtu.be/siEY3X15cZM>

当協会 人材育成委員会 委員, 光応用技術研修会 講師